

# 令和4年度 第1回 稚内市総合教育会議 議事録

## ◆ 日 時

令和4年11月29日（火）午後3時30分 開会 / 午後4時30分 閉会

## ◆ 場 所

稚内市役所5階 正庁

## ◆ 出席者

(構成員)	市 長	工 藤 広
	教 育 長	表 純 一
	教育委員	門 間 奈 月
	教育委員	佐 賀 孝 博
	教育委員	伊 藤 輝 之
(職 員)	教育部長	細 川 早 苗
	総務・スポーツ課長	三 上 雅 人
	学校教育課長	山 川 忠 行
	文化・社会教育課長	青 木 秀 貴
	総務・スポーツ課主査	市 川 美 紀
(事務局)	企画総務部長	佐 伯 達 也
	企画総務部副部長	田 中 克 良
	企画調整課長	太 田 真 大
	企画調整課主査	柴 田 憲 一
	企画調整課主査	野 坂 恭 平
	企画調整課主事	森 本 静 流

## ◆ 協議事項

- (1) 稚内市教育大綱について
- (2) 児童生徒の学力向上対策について
- (3) 部活動の拠点校方式への移行について

### 1. 開会のことば

#### 【事務局（企画調整課長）】

本日は、大変お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。若干定刻前ですが、皆さんお揃いですので、ただいまから令和4年度第一回稚内市総合教育会議を開催いたします。事務局を担当しております企画調整課長の太田と申します。どうぞよろしく願いいたします。なお、本日山本教育委員につきましては、所用のため欠席とご連絡をいただいております。始めに開催にあたりまして、

工藤市長よりご挨拶を頂きます。

## 2. 市長あいさつ

【工藤 市長】

大変お忙しい中、こうして総合教育会議にご出席いただきありがとうございます。表教育長、そして今日は欠席であります。山本教育委員が再任されてから初めての総合教育会議ということでもあります。もう11月も残すところ2日ということで、天気予報を見てもいよいよ冬将軍が到来しているんだなという印象を持ちます。よく、あちこちでお話していますが、第8波のコロナの感染、子どもから感染から広がっているみたいな話があって、本当に戦々恐々としていますし、また、大変お恥ずかしい話ではありますが、市役所の中も結構感染者、あるいは濃厚接触者が出ており、そういう意味では、大変なであります。早い時期から職員には、しっかりと緊急事態が出た時々には対応するようにという具合にずっと言っていました。皆さん大変だろうと思っていますけれど、何とかこれを乗り越りたいなと思います。

今日の会議であります。お手元にお配りしている会議次第のとおり、1の稚内市教育大綱についてから、3の部活動の拠点校方式への意向についての大きく分けて3つのテーマに沿ってそれぞれ協議をいただきたいと思っておりますので、これはあえて触れて申し訳ありませんけれど、忌憚のないご意見をいただければと思っております。改めてこうしてお出でいただいたことに感謝を申し上げ、何とか1日も早くこの感染が収まるようことを心から願って、簡単でありますけれど、私からの挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

【事務局（企画調整課長）】

それでは、本会議を開催するに当たり、議事録の署名についてお願いをしております。会議運営要綱第7第3項の規定により、佐賀教育委員を指名させていただきますので、よろしく願いいたします。なお、議事録については、事務局が作成をいたします。それではこの後は、工藤市長が議長となり進めさせていただきます。工藤市長よろしく願いいたします。

## 3. 協議事項

### ①稚内市教育大綱について

【工藤 市長】

それではさっそく協議事項に入っていきたいと思いますが、1番の稚内市教育大綱については、事務局から説明をお願いします。

【事務局（企画調整課主査）】

事務局を担当しております、企画調整課の柴田と申します。私の方から、稚内市教育大綱の取扱いについて説明させていただきたいと思っております。座って説明させていただきます。お手元に資料を配布させていただいておりますのでご覧させていただきたいと思っております。教育大綱につきましては、ご承知のとおり、地方教育行政の組織及び運営に関する法律において、地方公共団体の長は、教育基本法に規定する基本的な方針を参酌し、その地域の実情に応じ、当該地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に対する総

合的な施策の大綱を定めるものとするとしております。本市では、3年ごとに教育大綱を策定してきており、現行の取り扱いであれば、今年度中に今年度を含む令和6年度までの3年間を期間とした教育大綱を策定することになりますが、現行の取り扱いでは、市長の任期とずれが生じておりまして、策定時期が任期の途中であったり、最終年となってしまったり、一定のタイミングとならない状況となっております。この大綱については、先ほどのとおり、地方公共団体の長が定めるものということ踏まえ、基本的には市長の任期の初年度と当該大綱の策定年度が合うよう現行3年としている期間を4年間としていきたいと考えております。また、当該大綱期間の初年度に大綱の策定を行っている状況でありまして、年度途中にその年度を含む大綱を策定するところを大綱の最終年度に次期大綱を策定するという方向に見直ししていきたいと併せて考えております。さらに、国のデジタル田園都市国家構想基本方針に基づきまして、今後、まち・ひと・しごと創生総合戦略の改訂が見込まれていることから、総合戦略などとの整合性も図りながら策定していく必要があると考えております。以上のことから、令和3年度までの第2次稚内市教育大綱を令和5年度まで継続させていただき、令和5年度中に令和6年度から令和9年度までの4年間を期間とした教育大綱を策定する方向で進めさせていただきたいと考えておりまして、今回ご提案させていただきました。以上でございます。

【工藤 市長】

ありがとうございます。教育大綱の対象期間を説明のあったようなことで見直しをしたいという事務局からの説明ではありますが、これに関してご意見を賜りたいと思います。佐賀委員どうでしょうか。

【佐賀 委員】

今、ご説明あったように市長の考えと大綱を揃えるというのは基本的にはいいんじゃないかというふうに思っております。

【工藤 市長】

ありがとうございます。伊藤委員いかがでしょうか。

【伊藤 委員】

その方が実際に合うと思いますので、特に私は問題ないかなと思います。継続の期間が2年間そのまま2次を継続する形でいいのかどうかというのは、どこかで議論した方がいいのかなと思いました。

【工藤 市長】

門間委員お願いします。

【門間 委員】

私も市長の任期に合わせて変更するという事は合っていると思うので、それでいいのかなと思います。

【工藤 市長】

教育長からは。

【表 教育長】

この大綱そのものは意外と恒久的な話があって、特に1番目のところなんかは今の子ども家庭庁の話や今コロナの中で言われている、ずっと言われてきた子ども包括支援センターみたいな考え方と、そういうのを先取りした考え方を取っているのかなというふうに思っているの、そういう意味では、決して、長く使っているのが古くはなくて、これにさらに磨きをかけるような、そんなことも可能になる大綱かなと思っています。決して、延長することにそんなに大きな弊害があるということではなくて、これをさらにしっかりとしたものにしていくということが重要なと思っています。

【工藤 市長】

私も会議のメンバーの1人なので、私の意見も言わせていただきます。私が言うのも変ではありますが、さっきの説明を聞いていると、私の任期云々という話、もちろん私だけでなく、市長の任期云々という説明であるとすれば、私はむしろこの大綱そのものが、非常に関心があつていろいろと調べたんですけど、いろんなまちでいろんな作り方をされていて、実は私の任期云々というのは私の持論で、総合計画を議論する時にまさに私はそういう主張をしています。10年間で今はやっていますけれど、それはおかしいだろうと。むしろ、その市長の任期に合わせた総合計画の対象期間があるべきだと、それはずっと言ってきていて、結果それは採用されてないで今日に至って、うちの総合計画は10年なんだけれど、でも10年であろうが何年であろうがいいんだけど、この大綱の考え方は基本的には教育に総合的な計画があれば、それを引用してもいいよというくらいに、そこを尊重しているんだけど、私の調べた限りで総合的なものは、わがまちに個別には学校教育、スポーツ、あるいは社会教育だとあるんですが、総合的なものが無いとすれば、それを網羅しているのは総合計画なんだろうという具合に思うと、むしろ、総合計画は今何年までの計画期間を持っているかという、2028年なんですね。それをみた時に今いろんなものに触る時に2030年というのが1つのターゲットになっています。

よく言われる2025年、団塊の世代、我々もそうですけれど、まさにそれが後期高齢者に全員なるんだという話はあるけれども、例えば2030年はSDGsもそこにターゲットをおいているし、それからうちで言えば、直接教育とはあれですけども、いろんなエネルギーの関係についても究極的には2050年なんだけれど、中間としては2030年。だから、さっきの総合計画のターゲットとか目標年も2030年前後だし、そういう意味では、2030年を1つ頭に置いたうえで、このあとの計画期間を大体4年ないし5年で作りなさいという話になっているので、そういう説明で結果として2つに割るなら2つに割ってもいいし、というあり方でどうなのかなと、ずっと調べていて思ったので、今更ここで市長の任期だという話ではなくて、むしろそういう整理で大綱の目指すところ、今5年なら5年先、あるいはその先に2030年くらいを目途に目的にしてしっかりと作られていくという理由の方がいいだろうと実はいろいろ調べていて思ったので、そんなことを考えていました。

なぜ、こんなことを言うかと言うと、だからこそ長部局が担う意味があるんだぞと。でなければ、教育委員会がこれを作ってそのままで結構なものなんだけれど、現実は今も説明しているように長部局なんです。これを作ったりなんだりしているのは。ということは、まさにここでいう、デジタル田園都市国家構想とかまち・ひと・しごと総合戦略というよりもそういうこのまちの計画というか、視点をどこ

かにおいて、その中にこの大綱も取り込んでいくという観点が必要だし、だからこそ我々が、長部局が作るものだという具合に言われているのかなと思ったので、それを私の意見として述べさせていただきました。トータルでは、基本的にはどう区切ってもそれはそのとおりだなと。やってくれて結構。そんな目指すところというか、そんなところを意識してほしいなと思いました。トータルとしては、期間を見直すことに誰も異論はしていないので、そこはもう1回吟味しながらこれから進めてほしいなと。そんなことでよろしいでしょうか。ありがとうございます。

## ②児童生徒の学力向上対策について

【工藤 市長】

次は児童生徒の学力向上対策について、これは教育長からお願いします。

【表 教育長】

毎年この場で説明をさせてもらっています。客観的なものということで今日も2枚資料を用意してもらっています。これは、道教委が公表している令和4年度北海道管内の平均生徒数分布図とレーダーチャート、これも道教委のホームページから過去のを抜粋したものです。これを見ながら市民にも大変関心の高い学力問題についてですけれど、今までもこの場でお話してきたとおり、稚内、宗谷管内については、学力が大きな課題であるということについては、現在も変わらない状況だというふうに思っています。その中において、全国学力学習状況調査、国がやっていて、その正答率を発表して、それを道教委がいろんな意味で分析してくれているんですが、それらを見た中で、令和4年度の状況を見ながら稚内市のことをお話させていただくと、やはり小学校については、一定程度学力、点数を取れる状況に来たと思っていて、ほぼ全道と一緒になってきた。一部教科においては、全道を超える状況となってきていると。若干教科においては、算数についてはまだ弱さがある。これは中学校を見ると数学について大きな弱さがあるというのはありますが、小学校においては、概ね小学校6年生の状況ですけれど、少しずつですけれど、着実に全国に近づいてきている状況になっていると理解していますし、これについては、今までグングン塾をはじめ、いろんなものの成果だと思っています。

一方中学校においては、まだまだ少しずつですが、改善をしているんですけれど、年度によって良かったり、悪かったりしているんですけれど、やはりまだ厳しい状況にあるということは変わらないと思っていますけれど、改善の傾向はあると思っています。特に中学校においては、数学が厳しいという状況は変わりません。また、市内においては、全体でいうと、学校間で若干差があるということも事実でありますけれど、稚内全体としては、学校間とかそういうことに矮小化することなく、稚内市全体としての学力向上策ということで全校一致して進めていこうということで確認をしているところです。

令和4年度の北海道管内の平均成長率の分布を見ていただくと、今回道教委の方は、数字を公表してほしいということで稚内市も数字を公表しております。ただ、数字を公表していない市町村もありまして、今回公表している市町村のうちの大体10市くらいをそこに並べています。上川管内や留萌管内は公表していないので、個別の数字はわかりませんが、その数字と合わせて見ていただくとわかると思いますけれど、小学校の国語においては、全道平均を超えて、全国と近づいている。道内各市から見ても遜色ないところにあるということがわかっていただけたと思います。一方、算数においては、全道平均を2点ほど下回っているという状況です。道内各市の状況においても、概ね他の市も苦戦している

ところが多いですけれど、稚内としても算数は小学校も苦戦している状況です。3年に1回行われる理科については、稚内は今年度は全国を超えるような小学校の状況になっているということで非常に理科の数値が高い状況です。一方、中学校は、国語においては、まだ北海道と差はあるんですけれど、そんなに大きな差ではなくて、全道的に見ても他の市と比べてもそんなに大きな差はないところにいるんですけれど、数学は厳しい状況にあると。中学校においては、理科も厳しいところに、数学は相変わらず厳しい状況にあるということはこの数値から見て取れると思っています。先ほど言ったように小学校については、相当全道に近づいて、全国とももう少しというところまで来たというふうに思っています。もう1つのレーダーチャートの方を見ていただきたいと思います。これは令和2年度は、コロナの影響で全国学力学習状況調査がありませんでしたので、直近3年間を並べていますけれど、レーダーチャートなので全国が丸ですので、本当に全国に近づいて、丸い形になっていく、もっと言うと丸い形をオーバーしていくのが理想なんですけど、今年の小学校においては、丸の形に近づいてきたと思っています。一方、中学校はまだまだ歪な形になっていて、国語は全道、全国と変わらないんですけれど、数学の弱さがあるということです。

今までの経験から言うと、小学校が良い時は概ねその3年後の中学校も相当いい傾向を出しているのので、今年の小学生が今後中学校に行って、しっかりとしたものを出してくると中学校においても全道と遜色ない点数が取れる、そんな状況が近づいてきていると思っています。これがそのまま見えるかどうかは別にして令和元年度の小学生が今回の令和4年度の中学生なんですね。だから、令和元年度の小学校の数値がそのまま今回の中学生に移行しているんですけれど、中学校に行くと数学がさらに厳しくなっていると。国語はそういう意味では、中学校に行っても読むことなんかはそのまま全道と変わらないものを持っていますので、小学校の力というのは間違いなく中学校にも影響すると考えていますので、そういうことを含めて今小学校まで改善と言いますか、してきた部分については、必ずや中学校に実を結ぶと考えているところであります。中でも、各小中学校においても学力に関してはいろんな考え方がありますが、しっかりとまず全国学力学習状況調査においてもしっかりと点数を取れるということも1つの我々としても重要な判断と思っていますので、そういうことが可能になるように授業改善など進めている、そんな成果が少しずつ出てきているということをお話して私の方からの報告とさせていただきます。

#### 【工藤 市長】

ありがとうございます。令和4年度のレーダーチャート、平均正答率の分布の表を使いながら説明いただきましたけれど、これについてご意見等をいただきたいと思いますが、また佐賀委員からよろしいですか。

#### 【佐賀 委員】

小学校のところで先ほど教育長がおっしゃったように全道、全国平均に近づいているということなので、それと中学校と相関がある程度あるというふうに思いますので、いかに、小学校を、せつかくこうなったのには理由があるはずであって、たまたまその年の子だけが出来たとかだと全く意味が無いので、いろいろとやっている取組の何が有効だったのかというのを今一度点検してそれを、次年度以降も各種取組みに活かせるのかなと思っています。

【工藤 市長】

ありがとうございます。伊藤委員お願いします。

【伊藤 委員】

結果としては、喜ばしい方向に行っているかなと思うんですけど、佐賀委員が言うように何でこうなったかという理由が必要だと思いますし、これで一喜一憂している場合でもないかと思いますが、つまりもっとこの小学生が中学校に行くとか成績が上がるということは、逆にいうと、もっと下の層を手当てするともっと小学校がより上がってくとも思えるので、僕は幼児教育をやっているの、幼児教育を幼児へ勉強を教えるのではなくて、幼児がもっと伸び伸び育つようなことをしていくと、小学校にも影響をしていくのかなというところでそのへの幼小中の連携もうまく取れたらいいんじゃないかなというのも考えていました。

【工藤 市長】

ありがとうございます。門間委員お願いします。

【門間 委員】

まず点数に表れているところがこう見ると学力が全てと思ってしまうかもしれないですけど、出来る子もいて、出来ない子もいてというところの平均の中で目に見えていないところ、どのように学習に取り組んでいるのか、その取組の結果がたまたま点数に出るというのもあると思いますけれど、やはり勉強することに楽しさ、やりがいを見出しながらやっていかないと、点数は取れてもその先、例えば進学したり社会に出たりというところで、全部積み重ねの中で育っていくと思うんですよね。目に見えないところでどのように学習に取り組んでいるのか、やりがいを持っているか、楽しめているかということが要因としてなきゃ駄目なのかなと感じています。

私も幼稚園から小学生の子どもと体作りをやっているんですけど、ボールの数を数える時に 1, 2, 3, 4, 5 と 20 いくつまで数える場面があったんですけど、たまたまそこにサポートへ入ってくれていた人が学校教育の現場にもいた方なので、じゃあ 5 個の塊が何個できた？と問いかけたんですよね。そうしたら、まずみんな 5 個持つんですね。幼稚園児も小学校の 2 年生までいたんですけど、そして、5 個のかたまりが 4 つ出来たね、バラは何個ある？と言って、そうすると 2 年生は掛算を経験しているのでいろいろと説明してくれるんです。そういう場面を何回か作っているうちに幼稚園の子どもたちもそのあたりが理解できたんだなという場面がありました。なので、やはり楽しくわくわくと学べる環境かということも持ちながら、目に見えた点数と言うところとしっかりつながって力になっているところまでトータル的に見ていけるということも大事にしていただきたいと思いますと感じています。

【工藤 市長】

それでは私からお話させていただきます。確かに毎年こんなような教育長から話があって、1 点差、2 点差にどれほどの意味があるのかというのは正直思います。ただ、この何年間がずっと見ていて、正答率の分布の表を見ると、よその振興局の名前を出して大変恐縮なんですけど、この場だからあえて言う

けれど、根室、日高、宗谷は常連だなといつも思っていました。ただ、これだけを見ると、小学校では、同じような傾向は必ずしも変わってはいないけれど、これだけを見るとオホーツクは非常に特徴的だなと。小学校は随分悪い方にいるんだけど、中学校は決して良くなっているわけではないけれど、平均点の方に近づいてきているなど。うちと極端にいうと逆だなと。何かそのところを取組のきっかけがと言うか、何かヒントがあるのかなという感じで、具体的に何をするかはわからないけれど、これは非常に参考になるデータだったなど。

それから、先ほどもどちらかと言うと、問題の所在をもっとつかんでくれというのがこの場の意見の大きいところですが、そういう意味でも今度の資料はさっきみじくも教育長が言っていたけれど、この年の小学6年生は、この年の中学校の何年生になっています、それで初めて何となく客観的に何に問題があるのかと、単年度で言われてもよくわからないと。比較する相手も違いますので。何か資料の作り方も少し工夫をしてほしいなというのが印象でした。本当にこれは議会でもいつも問題になるし、特にこれだけを見ると中学校に問題があって、このレーダーチャートだけを見ると学力だけがどうこうというよりも、数学というか、そこが出来ないというのは理論的な考え方がきちんと育っていないんだなという感じがします。そこをもう少し重点的に取り組んでもらうとか何かそういうような工夫が無いと、時々で毎年いろんな特徴はあるんでしょうけれど、これを見る限りで言うと、令和4年度の単年度だけ見ると残念だけれど、そこは、中学校は平均的にそのところは本当に弱い所だなというのが印象ですから、もういい加減そこに重点を置いたほうがいいんじゃないかなというのが私の意見です。

総じて今それぞれの委員からお話をいただいたままだにこれまでの取組の有効さをもう1回点検した方がいいんじゃないか、あるいは幼小中の連携がどうなっているのか、さらには楽しさややりがいが必要だということも含めて、もう少し問題の所在を明らかにするというか、深堀するというか、それは必要なんだろうということがこの会議の意見だったなと思っていますので、是非またそれをしっかり押さえて取り組んでいただきたいと思います。他に追加でご意見等がございましたら。

#### 【伊藤 委員】

おっしゃるとおりだったんですが、認知、非認知の能力で言ったら、それは認知のテストだから認知能力なので、それを下支えしているのが非認知だと思っているので、先ほどと重なるところがありますが、幼児期からどんな経験をさせていくかというのが重要になってくるんじゃないのかなと、それが学力の伸びに響いてくるのかなと思っています、早期教育は意味が無いという研究結果も出ていて、早期教育をしても中学校くらいではその差が全く無くなってしまふ。小学校の時は早く学んだ人の方が成績は高いんですが、中学校くらいになると伸びが違って、追いつかれて逆転してくる現象もあると研究結果が出ているので、そのへんを考えると、幼少期の体験がすごく重要なんじゃないかと僕は考えていて、幼児教育をやっているわけですけど、認知能力と非認知能力が連携してくるとまた違ってくるんじゃないかなというふうに思っていますが、どういう手立てをすればいいのかは僕も手探りでやっています。

#### 【表 教育長】

今の話でいうと、計算するとかの力だけではなくて、正解のないようなものをしっかりと深堀しながら正解を探していくような力を、国もそれが今一番大事だと言っていて、全国学力学習状況調査もそう



いうものが点数、そういう能力が無いと国語や数学が解けないような問題も出てきているのも事実なんですよ。そういうことがこれから重要ということは我々も十分に、ただ、単に点数を取ることではなくて、そういう能力が無いと点数が取れないというふうな問題に変わってきているのも事実なので、そこも含めて、今言われてきたことに関しては、もう1度しっかりと我々としても学校現場と対応していきたいなど。我々から見ると点数を取れるということはそういう能力も当然付いていると考えていいような問題傾向を、国もそういうことを意識して作っていますので、そんなふうを考えながら進めていきたいなと思っています。

【工藤 市長】

余計な話だけれど、また議会でいろんなこれに関する議論が出てくるので、どちらかと言うとさっきの説明で小学校はある程度いろんな取組が見えやすいので非常に説明もしやすいし、議論も収れんしていくんだけど、ことこういふ具合に中学校の数値が、姿が見えてくると本当に議論をするのにも大変な議論になるんだろうなと思うので、そこは事務局の皆さんも是非しっかりと捉えて頑張してほしいと思います。よろしくお願いします。他よろしいですか。

③部活動の拠点校方式への移行について

【工藤 市長】

それでは、三番目の、部活動の拠点校方式への移行についてということで、これも教育長から。

【表 教育長】

こちらの紙1枚を用意しているかと思いますが、それに沿って説明をさせていただきます。今そこには市内の5中の児童生徒数と、部活動の今どういう部活動に入っているのか、どういう部活動が学校で実施されているのかを書いているんですけども、総じて数が少なくなってきている。よく言われるのが中学校に入って、例えば小学校から少年団をやってきたんだけど、その少年団をやっていた部活動が中学校にはないんだということが強く言われていたり、極端なことを言えば区域外入学をしたいという希望があったりするのが事実です。基本的にはそういう区域外入学は認めていないんですけど、そういう子どもたちが結構いるのは事実であります。部活動がないので、部活動があったとしても学校単体ではチームが作れなくて合同チームじゃないと試合に出られないような団体競技があるのも事実ですし、これも良く言われているとおり学校の児童生徒数が減っているものですから教員の数も減っていて、中学校の先生方の中で、部活動の中でほとんど経験のない先生が顧問として部活動を教えなければいけないというのが先生方の大きな負担になっているということも事実で。中学校の部活動の方式がこれから永遠に続くかどうかは別としても、中では教育活動の一環として部活動があって、スポーツや文化を振興するうえでは、中学校の部活動は重要な位置を占めていると思っていますので、我々としては、子どもたちが部活動を通じて文化、スポーツ、芸術に親しんで、少しでも極めてほしいなと思っています。今の学校において、単独で学校でやるには限界があるんだろうなと考えています。そういう中で拠点校方式という方式がある地域では取られているところがあります。これは、いろんな方法があるんですが、そのイメージですが、稚内中学校では男子バスケットをやろう、南中学校ではサッカーと女子バスケットをやろうとか、東中学校では野球をやろうとか、その学校で種目を決めてその拠点校に、

市内のどの中学校からでも部活動の時間にその学校に行って部活動を行うという方式を拠点校方式と言っている。そういう方式を取ることによって、今言ったように自分の学校に今までは自分がやりたい部活動がなくてもその拠点校に行くことによって、部活動に参加することが可能になるという大きなメリットがあるということと、部活動は集中してやることになりますので、男子バスケットであれば1校、女子バスケットであれば1校というふうに集中してやるので、指導者も今まで各校でやっているのと比べると少ない数で済む。拠点校の指導者は競技を経験している先生が指導することが可能になるということで部活動のメリットがあると思っています。

今、部活動の地域移行ということが言われていて、これは土曜、日曜の部活動を令和5年度から令和7年度までの間に地域に移行するというのがスポーツ庁の方針として決められていて、その方向にしなければいけないということで文科省も動いています。そのことを見据えるとこの拠点校方式を取ってしまうと、例えば男子バスケについては、土日はバスケットボール協会にお願いしたいとか、男子バレーについてはバレーボール協会に土日はお願いしたいとかということで地域移行も協会にとっても会場が1箇所、ないし2箇所しかないので指導者を分散しなくてもいいということもあり、今言われている地域移行にも非常に取り組みやすい方式だと言われています。我々としては、子どもたちの学校の現状から考えて、まず自分たちがやりたいスポーツや文化をやらせてあげたいということから考えて、何とか今まで各学校で単体でやっていたものからこのように中学校の拠点校方式によって進めていきたい。そして、部活動の地域移行を拠点方式を基に各スポーツ団体や地域にお願いするような地域移行として進めていきたいということのある程度計画をもって進めていきたいと考えておりますので、是非この場でも議論が出来ればいいかなと思っています。

**【工藤 市長】**

今の説明の中で、生徒も減るし先生も減る中で今いる子どもたちの希望に応えていく、スポーツに関してということで一つの提案としてこの方向を示していただきましたが、これについてもご意見があればお聞きしたいと思います。まずは佐賀委員から。

**【佐賀 委員】**

教育長がおっしゃったようにやりたいことが出来ないというのはなるべく避けてあげたいというのがありますので、私の知っている例だと、ある都市なんですけど、ずっと野球をやっていたけれど、集まらなくてしょうがないからバドミントンをやりましたみたいなことになるというのは可哀想かなと。せっかくそういった受け皿的なことが出来るのであれば、各種移動手段はどうするんだという問題はあるとは思いますが、それぞれできちんと競い合う、あるいは高めあうことが出来るのは、ある程度人数は必要、特に団体競技は必要だと思いますので、是非こういったことが可能であるなら、移行できると良いなという考えでおります。

**【工藤 市長】**

伊藤委員どうですか。

**【伊藤 委員】**

多分これから中学校の部活も大きく変わっていくだろうという中で、その途中の形としてこの形を取るのとはとてもいいのではないかと感じています。私ごとですが、長男が中学校の野球部にいるんですが、夏の大会が終わって3年生が抜けたら1チーム出来ない状況で4中合同になったんですが、合同練習に行ってもすごく楽しそうで、人数がいるのは重要だなと感じましたし、説明会で先生たちの話を聞いても先生たちも割とそれを良いふうを受け取っている面もあったので、良いふうになるんじゃないかというふうに予測しています。なんとか好きな競技を好きなだけやりたいという中学生の願いを叶えてあげたいと言う中では選択肢としては、有効な選択肢じゃないかと思いました。

**【工藤 市長】**

では、門間委員。

**【門間 委員】**

感じたところがいくつかあります。とてもメリットがあるなということと、今後必要だなという仕組みだと思えます。そうしながら、平日は学校の先生の指導で休日は協会や専門的に指導する人と言った時に指導の方法だったり、価値観だったりを共有したり共感したりというところを大事にしないとばらばらと違うことを言われた時に子どもたちが戸惑うと思うんですね。私も昭和の時代に部活やスポーツをやっていた人間なんですが、経験が豊富な指導者というのは自分の経験値から指導する人が多い。今スポーツというのは科学や力学的なこととか人の体の仕組みや心の仕組みや脳の仕組みで人間は動いていますので、そういうところが指導者の質の向上が同時に必要になってくると思います。仕組みを作るのと、人を育てる、子どものスポーツ、夢に向かって頑張っていくというところで大人が変わっていくということがすごく重要になっていると思います。

そうなった時には子どもの頃からのチャレンジしたい、こういうふうになりたいというところをサポートする子育ても大事ですし、私の活動から言うと、赤ちゃんの発育発達、0才と関わらせていただいているんですが、便利な道具が増えて赤ちゃんの体の動きがなかなか経験不足のまま立って歩いて幼稚園に行くと小学校に行くと、姿勢が出来ないので座ってられないですね。ちゃんと座りなさいと言っても座るだけの体の仕組みが機能してないんです。字の書き方も体感が安定していないと細かいことが出来ません。縄跳びの縄を回すのも赤ちゃんの動きを見ているとすごくわかるんですね。小学生とか幼稚園の子を見て、ちょっとここが不足しているかなというのも面白いぐらい見えてきます。そういうところもつながってきているので、小さいうちからそういう成り立ちと言うのを知りながら、人の体の仕組み、運動はどうやって成り立つのか、それが日常生活の姿勢やスポーツになっていくんですけど、そんなことに興味を持って子どもたちに関わる大人が増えていくと他の仕組み、新しい次の時代の部活の取組は生きてくるのかなと思います。そういうところも気にしながら子どもたちの夢や目標を大人たちが支援して、共有、共感して進めていけるそのような仕組み作りも同時に進めていただきたいなと感じております。

**【工藤 市長】**

ありがとうございます。この提案の内容について、特別異論があるわけでは全くないですけども、その後の地域移行の話も含めてということで、こういうことを検討しなければならない状況というのは、

まさに少子化の最たる話なんだなど。余計な話ですけど、今恐らくこのまちでいうと、年間100人～150人が生まれて、450人は死んでいっている。人口も減るし、子どもはもちろん減ってきているから最終的に学校でこういう問題を抱えざるを得なくなってしまうと。我々にとってみると、この対応も大事だけれど、その入り口のところの対応というのはもっと迫られているんだなというのが実感です。これが本来のあるべき姿がどうかは別にしてもここをしっかりと支えながら何とかもっと子供が増える施策というのが、それは一体何なのか、それは、一自治体だけで出来るのかどうなのかもひっくるめて、問題提起されたなという気がします。ただ、今の全体のご意見を伺った限り皆さんそれぞれの立場で指導されている経験、あるいはいろんな方の体験談をひっくるめてこの取り組みについては、その後の仕組み作りを含めてのご意見はもちろんありましたが、概ねこの方向で進むことにそれぞれ理解を示しているというふうに受け止めましたが、そんなところでよろしいでしょうか。もし、何かあればご意見いただきたいと思います。よろしいでしょうか。では、そんな感じでこれから進めていただきたいと思います。

#### 4. その他

【工藤 市長】

今日の協議事項は以上でありますけれども、この際でありますから何か。まあ、このメンバーでは色々とお話するチャンスはありますけれど。何か、折角ですから、あればお話しを頂ければと思います。よろしいですか。

※意見なし

#### 5. 教育長あいさつ

【工藤 市長】

では締めで教育長の方から閉会の言葉をもらいたいと思います。

【表 教育長】

はい。今日は総合教育会議ということで、忌憚のない意見を市長を交えて頂けて大変うれしく思っています。市長も今おっしゃられた通り、やはり我々が子どもを育てて、そして子どもがこのまちに愛着を持って、このまちから去って行ったりまた戻ってきってくれる。そんなサイクルをこのまちの教育を通じてまちづくりに貢献できるということが一番の目的だというふうに思っています。そんな思いでこうやって、やってきていますし、今日学力という問題が基盤になるのだということで、今日受けた指摘を含めて進めていきたいと思っていますし、やはり子ども達には特に多感な中学生の時に、自分の好きな道というか、部活動を、まあ部活動が今後どうなるかというのがわかりにくいんですけど、そういうものを通じて生きがいを見つけて、また違う才能に気が付くというのも重要なので。私も非常に重要だと思っています。今日市長からも同じような共感を得たので大変うれしく思っています。本当に少子化の問題に真正面から挑戦できるというか、こんなまちだから是非子どもを産み育てて欲しいと、思えるような、是非この教育行政を通じてやっていきたいなと思っておりますので、また、教育会議におきましても教えを頂くことをこれからもお願いして、今日のお礼の挨拶とさせていただきます。本当に今日は

ありがとうございました。

## 6. 閉会のことば

【事務局（企画調整課長）】

教育長ありがとうございました。以上を持ちまして、令和4年度第一回稚内市総合教育会議を終了いたします。本日はご参加ありがとうございました。

○稚内市総合教育会議運営要綱第7第3項の規定により署名する。

教育委員 佐賀 孝博

作成者 森本 静流